



## 若者文化と反グローバル運動（2003年度 和光大学 総合文化研究所重点研究プロジェクト 人文科学、 表現文化における「民族誌的転回」をめぐって）

著者	ペラソヴィッチ ベンヤミン
雑誌名	東西南北
巻	2004
ページ	170-177
発行年	2004-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00002973/">http://id.nii.ac.jp/1073/00002973/</a>

## ベンヤミン・ペラソヴィッチによる講演

六月終わりにザグレブ大学助教授、ベンヤミン・ペラソヴィッチを招き、和光大学でのワークショップ、ゼミでの討論、講演などを設定した。また早稲田大学で行われた国際学会「カルチュラル・タイフーン2003」で、「若者文化と反グローバル化」についてのパネルセッションに参加しつつ、「民族誌」的方法と接続する文化研究についての対話、討論を深めた。和光大学では「ラストファリスムの文化移動」、「サブカルチャーと空間」についての講義、報告などを行なった。また北九州小倉で続いている都市論と美術、サブカルチャーのワークショップ（Re/Map）に参加し、「心理地理学」的な想像力や調査法と、地方の若者文化やNGO活動の接点について検討した。特にザグレブ、デトロイト、北九州、東京をテクノ/ダンス音楽以降の文化のなかでマッピングするレクチャーを開催し、参加者と討論した。

ベンヤミン・ペラソヴィッチ Benjamin Perasovic はザグレブ大学（クロアチア）応用社会研究所助教授で、若者文化（テクノ、フットボール、クラブ、その他）を研究領域とする社会学者であり、博士論文をもとにした『都市の部族』（Urban Preme）という著作を出版している。この著作はクロアチア政府より社会学や理論書部門で賞を受けている。過去七年にわたって、本プロジェクトの研究代表者である上野と共同研究や調査を続けている。過去二回、来日しており、今回は三度目の来日であり、和光大学で活動するのも二度目である。

ここに紹介するのは、「カルチュラル・タイフーン2003」でのプレゼンテーションの記録である。当日の通訳は上野による。

## 若者文化と反グローバル運動

ベンヤミン・ペラソヴィッチ

Youth Cultures and Anti-Global Movement

Benjamin Perasovic

最初に、少し簡単に概念を振り返っておきたいと思います。

社会学、社会科学としての「若者文化」概念を振り返って、自分が暮らしてきたクロアチアの例なども含めて、サブカルチャー（subculture）研究の試みを見ていきたいのですが、若者文化、

ユースカルチャーという概念そのものは、そもそも複数の、多義的である。どれかこうでなければならぬということはありません。このことがまず、若者文化に対する民族誌的アプローチの前提にもなるし、フィールド調査から結果的に見えてくることにもなります。

五〇年代にはサブカルチャーというのは、よく使われました。五〇年代が終わり六〇年代になると、今度は対抗文化という言葉が使われたわけです。こうしたことを分析するときに、社会学における機能主義的な立場、マートンからアルバート・コー

エンにいたる流れのなかで「逸脱行動」や「非行」delinquency という概念に焦点があてられていくと、同時代にバーミンガム学派（七〇年代における英国文化研究の拠点）のカルチュラル・スタディーズが、マルクス、グラムシなどを読み直しながら、多くのすぐれたサブカルチャー研究を輩出しました。一見すると、機能主義とマルクス主義というのは、すくなく違ふと普通は言われるのだけれど、ことサブカルチャーの問題に関しては、ある枠組みを共有していたのではないか。つまり、サブカルチャーというのは、ある社会構造からくる矛盾や抗争（コンフリクト）を解決する手段、問題解決のきっかけや入り口としてありえたということに関しては、意外なことに機能主義とマルクス主義は、社会学の枠組みの中では対立する理論パラダイムでありながら、全く図式を共有していたのです。

特に強調しておきたいのは、バーミンガム学派にしても、機能主義学派にしても、サブカルチャーが階級、特に労働者階級と強く結びついている点を見ていました。むしろ、現在の社会でも階級のことを無視する気はないのですが、たとえば昔からの整理のようにヒッピーは中産階級で、パンクは労働者階級だと、バーミンガム学派が問題にしたようにイギリスの社会について言えたとしても、その分類や枠組みが、本当にクロアチアや日本など、今のこの社会で、サブカルチャーのなかに階級概念をそのままそれぞれの文化のシーンに適用することは無意味です。ティーンボーイとか、ヒッピーとか、フリーガンとか、それぞれ任意のトライブが必ず特定の階級に属しているという

ふうにはならないのではないかと。まず、そのことを確認してきたい。

少なくともバーミンガム学派のカルチュラル・スタディーズは、「対抗文化」counter culture を中産階級、ミドルクラスのカルチャーだと解釈したわけです。でも、そうだとすると、六〇年代末のアメリカにおける、様々な社会運動、反人種差別の運動とか、反戦の運動にそれがそのままあてはまるかと言えば、そうではない。しかし、だからと言って、サブカルチャー、カウンタカルチャーといった用語を丸投げ、ほったらかしにして投げてしまふのではなくて、これまでになく連結や連帯の可能性というか、最近のカルチュラル・スタディーズの言葉で言う、感情や無意識、欲望や快楽のもたらす結びつきである「情動」にもとづく連帯 affective alliance みたいなものの可能性を考える必要があるでしょう。実際問題として、今世界各地で起こっているいろんな運動にも話を広げたいと思います。

たとえば、反グローバリゼーション運動というものには、理解しにくかったり誤解されやすい部分もある。実際に運動自体はグローバルに広がっているし、真の意味でのグローバリゼーションを求めているのに、その「反」の姿勢にはいささか人を混乱させるようなところがある。いずれにしても言えることは、支配的価値、支配的文化に対して、それに対立したり、抵触するかどうか、それらに抵抗する意志をもった文化というのはあるわけだから、今述べてきた流れを全部棄てる必要はないのだ

けれど、同じようにそのまま使えるわけではない、ということ  
を忘れてはならないでしょう。

一般にオルタナティブという言葉をもみな都合良く使うのだ  
けれど、これは日常会話でコーラかペプシかということも、選  
択をするという意味ではまさにオルタナティブになってしまう。  
そういう意味でのオルタナティブではなくて、コーラもペプシ  
も「選ばない」という、支配的によく飲まれているものと「違  
う選択をする」ということを考えなくてはいけないわけで、こ  
れは単に言葉の選択にとどまるものではありません。

実際、様々な抵抗の運動というのが失望を招いたのは、様々  
なラディカルな、あるいは「選択の外に出る」オルタナティブ  
な指向をもつ運動や実践が、しばしば回収され、結局、システ  
ムに絡めとられてしまうからです。抵抗の運動の持っていた要  
素というのは、企業や権力に使われていつて回収されてしまう。  
自分たちの欲望というのは、快楽や喜びみたいなものも、スベ  
クタクル（社会）に回収されていくという言い方がある。みん  
な、だまされていると。みんな盲目でイデオロギーに目をつぶ  
られていて、そんな消費はもうやめて、ものは買わないでいこ  
う、市場化された商品を買うのをやめて、もっと自分のライフ  
スタイルにあったものを買おうと主張したとしても、依然とし  
てそれはまだショッピングだし、消費することなのですから、  
単純にイデオロギーや権力やスベクタクルに騙されていて、き  
みたちの欲望は違うと言っても仕方がない。問題は、市場とか、  
マーケットとか、メディアに当然われわれは巻き込まれている

し、取り込まれて（co-opted）いる状況のなかで、巻き込まれ  
ながらの「象徴的抵抗」symbolic resistance ということは可能  
だし、いろんなレベルの活動の象徴的抵抗としてリンクさせる  
ことというのは、いっぱいあるのではないか。たとえば、空き  
家を占拠して勝手に使う、スクウォッター（空き建築不法占拠）  
の身ぶりや文化と、フェミニズムやエコ（環境運動）などは、  
時と場合によっては、それぞれの問題解決プロセスの間で互い  
に矛盾するかもしれないけど、同時に思わぬ仕方ですななるこ  
とだってありうるのです。

「新しい社会運動」New Social Movement という概念という  
かタームがあつて、これは八〇年代に盛んに使われるようにな  
ります。それまでの運動のあり方とは違う運動ということであ  
り、たくさんの有名な社会学者たちが、この概念を使いました。ユ  
ルゲン・ハーバーマスとか、アグネス・ヘラーなどの人たちに  
したがって言えば、新しい社会運動には三つの鍵がある。第一  
にフェミニズムやジェンダーの問題、第二にエコロジーや環境  
の問題、第三に平和、反戦ということですね。これは、ネット  
ワーク化の先ほどから言っている象徴的抵抗に草の根のネット  
ワークを張っていく時の取り組みの「共通分母」common de-  
nominator というか、プラットフォームになっていきます。ただし、  
どこかこの見方には、うわべだけの表層的なところがあると思  
うんです。というのは、一般にこつした著者たちは、「新しい社  
会運動」を一つの課題（イシュー）にとり組む運動であると主

張する。女性の位置（地位）の問題とか、環境の問題といった個別の課題や係争について、社会を全面的に変革どうこうしようではなくて、一つの問題について考え、活動する姿勢のことです。

反原発から反原子力、反核へ、という主張の間には様々な局面があります。ある立場からすれば、それは「当然」資本主義システムの批判と結びつきます。しかし、もっと個別に、ある原発を自分の家の近くに作って欲しくない、といった、個別の利害や関心に沿った、そこから出発する運動もあります。

わたしは大学で社会学を教えるかたわら、クローアチアで Spice（スピッツァ）という NGO の代表（プレジデント）をしています。様々なドラッグの「苦痛／弊害緩和」Harm Reduction の運動です。これは社会におけるドラッグの解放や合法化を訴える運動とは異なります。この点は誤解されては困ります。一定数の、それも少なくない人々が現に今の社会において様々な物質を使用しているのであれば、その人たちが健康面でも法的、社会的にもトラブルに陥らないようにするための社会的なプログラムを作る運動です。ニコチンやアルコールのように WHO（世界保健機構）に「ハードドラッグ」（致命的な危険のあるドラッグ）と明確に指定されている物質が日々当たり前のように消費されている現実にあって、その他のドラッグの使用を社会に「それなりに位置づける」情報の開示、教育、啓蒙、偏見の打破などのキャンペーンをしています。クラブで若者たちに、あらゆる種類のドラッグの問題点と使用上の注意をきち

んとフライヤー（チラシ）に盛り込んで配ったりしています。批判もありますが、これは EU レヴェルでも推進されているグローバルな運動です。日本のように、この件に関する別の事情や、様々な偏見や問題点のある社会ではこのような運動は難しいのかもしれませんが、早晩、世界のこうした流れのことを無視することはできなくなるでしょう。一つの小さな運動は、世界の社会や政治の、強いて言えば「トランスローカル」な流れにこの意味でもつながっているのです。

このような文脈で、もしも「新しい社会運動」は政治や運動の新しい、次世代のかたちであって、これまでの政治や社会運動は古びた意味のないものと見なすとすれば、これは表層的にすぎます。よくある整理ですが、八〇年代型の様々な社会学理論による「新しい社会運動」の定義や記述をあげると、「赤から緑へ」、そのように整理されることが多い。実際これは、魅力的なとらえ方だし、そういう転換の側面もなくはないのですが、果たしてこれで本当に整理できるのか？

六〇年代は平等や自由の問題で、八〇年代は自分の生き方、自分の生きるスタイルの方が大事だ、という言い方は、なるほど整理としてはあたっているけれど、実際問題、いろんな運動をやっていた人が、赤から緑へ、という、共産主義から環境運動、女性運動などへという枠組みの移行（パラダイムチェンジ）に居合わせたと同時に、彼らヨーロッパの多くの活動家たちは、実際に議会に入って政治活動をしている人がいっぱいいるのです。一つ例をあげると、ドイツで八〇年代の終わりにあった

デモです。それは「国勢調査」に反対する、厳格な市民についてのリスト化や調査に反対するデモでした。「赤から緑へ」という図式が本当なら、階級闘争以降の運動はのんびりした、ゆるいものだという紋切り型のイメージをもつ人がいるかもしれません。しかし、実際にはこのデモで何と三人も若者が警察との衝突で死んでいるのです。こういう事態だってあるわけで、簡単に「赤から緑へ」であるとか、個別の運動という言い方に片づけられないところだってたくさんあることに注意しないといけない。こうした運動のミクロな側面、とても微細な肌合いのようなことを問題にする理論的視線に、「民族誌的なもの」は明らかに入り込んできています。だって、デモやキャンペーンに居合わせる人々、群衆の言葉や身ぶりを見る、あるいはともに生きるということがあるのですから。

要するに、世の中での整理にしたがえば、六〇年代にはアメリカに代表されるような「対抗文化」(カウンターカルチャー)があつて、八〇年代にはヨーロッパを中心にサブカルチャーとも運動する「新しい社会運動」があつて、九〇年代は、また二一世紀は反グローバリゼーションだ、というような移りゆきがあり、決定的に何かが変化したいな整理があります。けれども一つ注目して欲しいのは、個々の異なる運動「動きのなかには似た表現とか似た小さな争いがあり、社会構造上の問題とか、政治的決定のかたちとか、この三つの時代の違いは確かに整理できるのだけれど、変わってきただけではなくて、変わっていない部分もとても多くあると思われるます。

特に八〇年代の新しい社会運動から現代の反グローバリゼーション運動へという言い方は、場合によっては誤解を招くでしょう。この言葉を使うようになった時にポストモダン主義の文化や理論の影響というのは、自分はポストモダン思想に明るくはなく、また懐疑的な部分もあるけれども、新しい運動に對し、いい作用、ポジティブなヴァイブレーションを与え、前向きなインパクトを与えたのではないかと思うのです。そうした「情動的な連帯」にもとづいた関係を運動と呼ぶというのは面白いと思います。実際、若い人たちは「ムーブメント」という言葉を社会運動や政治運動ではなく、自分たちの表現や文化のシーン(現場)を説明するときに、それらとほぼ同一の意味で「ムーブメント」という言葉を使います。ここには社会学者や社会科学者の呼んでいるのとは違う意味での流用性というのがあつて、しかし、その言葉の流用性と流通の仕方、その「象徴的抵抗」や「情動的連帯」みたいなものをつながっているところがあると自分は思う。

まさにここで生きることそのものの祝祭性というか、パフチンなどとも関連する「生の祝祭」(生きたカーニヴァル)という概念を立てることが出来ます。こんな用語を使うと、エロスとタナトスとか、昔の社会学者や哲学者がいろいろ言ってきたことかもしれないけれども、これはむしろ日常的には単純なことです。つまり、自分の喜びや快樂というものを追求することが全く自然に政治と結びつくこと、快樂が政治になるというところが、あるはずで。イデオロギーや歴史的「目的」を通して



外側から、こうやってこうしなければいけないとか言うのではなくて、自分の感情や情動にそってみんなで好きな音楽を聴くとか、コミュニケーション的につながるという、その喜びがまさに「政治」になる。これをわたしは生の祝祭性、生きていることのお祭り、生の政治と言ってみたい。民族誌的な方法は実はこのことを気づかせ、活性化する。教科書的でアカデミックな民族誌やフィールドワークのことを言っているのではなく、「観察が同時に参加／参与になる」ような奇妙な場面のことを考えているのです。その意味で言えば、まだ自分はムーヴメントという言葉棄てない、もちろん古い意味での、使い方を続けるわけじゃないけれども。

抵抗という言葉はカルチュラル・スタディーズでしばしば使われてきていて、特に使われすぎたんじゃないか、あまりに抵抗と言いつつまた「階級闘争」に焦点を置きすぎてきたのではないか、といった反省が最近の研究動向では言われることが多くなっています。しかし、すでに述べたように「象徴的抵抗」という可能性はまだ開かれていて、具体的には反グローバリゼーション運動というのは、今まで考えられていた運動とぜんぜん違ってきます。

これは運動として何に対して反対し、何に対して賛成するかってことは、とても見えにくいかもしれない。今まで言う意味での運動としてとらえにくく、誤解を招きやすい一つのポイント、グローバルな正義を求めるといったさいにグローバルとは一体何なのか？ 反グローバル化と言う場合には、グローバ

ルなものを全て拒否するのだろうか。もはやインターネットも使わず、全くもはやモノも買わず、輸出入も拒絶するのか。そういうことではないはずで、ある特定のタイプのグローバリ化に対する抵抗という意味で、抵抗の内実も変わってくるし、グローバル化という言葉の本来の使い方も変わってくるのではないかと思います。あるタイプのグローバリ化というのは、ここでは多分、アメリカニゼーションとか、マクドナルド化、ないしスターバックス化でも良いわけですが、そういったものですね。六〇年代、八〇年代を通して、若者文化と文化の政治や運動はつながりを持っているけれども、もし今の反グローバリゼーションの運動に決定的な転機があるとするならば、それは自分が他と違うオルタナティブなアイデンティティを表現することではないか。先ほどのペプシとコーラみたいのではない、根底的に異質と言える選択を、自分で表現するということかたちのことです。

間違えてはいけなのは、一般にグローバリゼーションと書かれているものも、ある特定のタイプのグローバリゼーションのことであって、ここが誤解を生みやすい。若者文化でも、たとえばMTVみたいなものだけ見ていたら、何か決定的にグローバリゼーションを肯定しているように見えてしまうけれども、自分としては反グローバリゼーションというのは、若者文化の重要な一部分としてあるということを言いたい。だから、こう一つの集まりの中でも、いろんなタイプの人がいるし、一人の人間が複数の集まりにいろんな違ったタイプが存在することも

あるのではないか。

クロアチアの例をとると、反グローバリゼーションのデモでは、三〇代以下の人たちがすごく多くて若者がすごく多い。そこでは様々に異なったトライブが、別々の文化やライフスタイルをもって複数のトライブが連帯、連携しています。それは政治的にはつきりした言葉をもった、イデオロギーにもとづいた連帯と言ふよりは、情動のつながり、affective alliance でありたっている。決定的なのは、こうした感情にもとづく連帯がいつも音楽に媒介されているということです。いつもテクノ、インダストリアル、ハードコア、ダブその他何でもいいのですが、音楽が、重要な役割をそれぞれで果たすということがあって、まさにパンクなどは歴史的なケースですね。最近の「共通分母」というものをあげると、ハードコアが非常に重要です。なぜクロアチアでハードコアが重要なのかというと、それはパンクを脱中心化しうる要素だからですね。西洋中心主義でない、つまりセックスピストルズとか、そうした主流の音楽ばかり聞いているのではなくて、イタリアとかフィンランド、日本などの、世界中、それから、クロアチアの中のたくさんのインディペンデントなデブ、ミニコミ、ファンジン（ミニコミ）などが流通し、お互いに売りあったり、交換したりしています。利益を儲けるというかたちではなくて、アメリカ中心、アングロサクソン中心以外の音楽が流通したという意味では、ごく自然にある特定のタイプのグローバル化に逆らいつつ、それでいてグローバルなつながりになっているという運動が、まさにクロア

チアのハードコアでは起こっていた。もちろん、世界規模でもデッドケネディーズやクラスといった集団でも同じようなことが言えます。最近世界各国で盛んになっている反戦デモやピースパレードを見ると、長髪で平和を合い言葉にヒッピーのように見えるけれど、聞いている音楽はハードコアであるという例や、テクノが好きと言っても、別にお洒落にクラブに入りびたるといふよりは、ものすごく汚い格好をしたスクウオッターの少年少女であるとか、ラスタファリアンの格好をしているのにテクノのパーティの音楽で踊っている人たちのように、おそろしく気違いじみたクロスオーバーというかハイブリッド（異種混交）化が、トライブとトライブの間に起こっていて、それが反グローバリゼーション運動の渦中に見いだせるというのは、自分としてはとても面白いと思います。IMFやWTOのグローバルな統治に石を投げたりモノを破壊することで「アンチ」を表明する人々もいれば、そうした国際機構にロビー活動や様々な交渉を通して働きかけようとする人々もいる。そして大きなデモや集まりの横でテントを張ったり、何となく音楽を楽しむ集団生活をするといった人々もいる。この最後のタイプの集団やトライブは民族誌的対象にもなりえますし、同時にその混交し横断的なスタイルやアイデンティティのゆえに、一つの運動のなかで民族誌的媒介の役目を果たすということも言えるでしょう。

六〇年代、八〇年代、九〇年代の対抗文化と「新しい社会運動」の関係はグローバリゼーションの運動の間には、とても似



たところがある、似たところを指摘すること、深いところの類似点を捕まえることが、今はとても大事だと思います。もちろん、違いはいつばいあるけれども、どこが決定的に通じているのか、という話を話していきたい。反グローバリズムの運動の中には、エコロジストもいれば、アナキストもいる。菜食主義も、ただ肉を食べないということではなくて、肉に食わせる穀物があるのだったら人に食べさせられるんじゃないか、というメッセージの人から健康志向の人までいます。これはジェンダーの問題とも関連していて、野菜を食べるということには、自分のマスキュリティ（男らしさ）、攻撃性というものをどうするか、肉とつきあい方をどう変えるか、ということが含まれます。ここに生まれつつある新しいトライバルな、新しい部族文化の形成と、多様で異質なトライブのクロスオーバーというのは密接に関わっています。統計をとったわけではないけれども、非常に多い数の反グローバリゼーションの参加者が、菜食主義者であるということの意義はこうした部分にあると思います。

問題は、何が未来に社会をこうするんだという、ラディカルな社会の変革をかかげるというよりは、自分をまず変える、自分の生き方から何か新しいことをする、ということがすごく大事で、日常生活から出発し、日常生活を批判するという日常生活の変革こそが重要でしょう。何か社会全体を革命しなきゃならないとか、階級闘争でなければならぬとか、そういうことではないのではないか。右と左、右翼と左翼という分け方が、

無意味だとは思わないけれど、非常に難しくなっている、たとえば右翼の連中が、アメリカが嫌だとか、グローバル化が嫌だという理由で、反グローバルの運動に加わるということが世界中で起こっています。そうしたねじれたリンクもあることを考えないと、今までのような、右と左というような、言い方では捕まえられないのではないか。

クロアチアの例を出すと、最も右翼的な出版社から、ピエール・ブルデューのネオリベリズム批判の本が出版される。それはクロアチアの政府がEUに参加したいということに対する、アンチの姿勢を示すために極右の出版社がブルデュー、まあほぼマルキストに近い人の本を出すという事態、これをどうとらえるか。アンチグローバルのデモがザグレブで行われるときには、有機農業の村を自律ゾーンとして運営しているのが、ジョージ・ソロスの財団に支援されたバンクスだったり、アナキストだったり、スクウォッターだったりすることもあるので、極右の若いスキンヘッズの連中は、ただ一つの理由、バンクスやアナキストという、自分と違うライフスタイル、自分が嫌いなトライブがやっているという理由で、反グローバルのデモに極右はこないで、自分たちだけで集まってデモをしている。こういうねじれもあつて、これまでの右翼とか、左翼というところ方だけでは問題がつかまえきれないと思います。しかし、問題はむしろたくさんさんのリンクが、いろんなトライブの間にも、それに時代の間にも、あるということをきちんととらえることではないでしょうか。